

図書館報 みかづら

和歌山県立医科大学図書館三葛館



目 次

館長ごあいさつ -----	1	子育てと図書館の思い出 -----	6
本を読むこと -----	2	自分なりの正しい答えをさがす -----	7
私を支えてくれる本たちとの出会い -----	3	4年間で振り返って -----	9
その人らしさを理解する -----	4	平成30年度三葛館活動記録 -----	12
My Never-Ending Philological Journey -----	5		

館長ごあいさつ.....

図書館報みかづら第23号の刊行に当たって

図書館長 (保健看護学部 教授) 森岡郁晴

図書館三葛館では、今年も学生、教職員ならびに学外者に向けて「図書館報みかづら」を発行します。今回は第23号として、6名の先生方に加えて、昨年と同様に、4年間の図書館の貸し出し数が多かった学生に授与される「ベストリーダー賞」の1位を受賞された方からの寄稿も含めています。それぞれの方の図書館についての思い出や後輩たちへのメッセージなどをお読みください。

社会の変化は激しく、技術革新も急速であるため、常に新しい知識が生まれ、今の最新知識は急速に古くなり、誰もが情報収集を絶えず行うことが必要な時代になりました。従来学会誌等は書籍であり、調べたいものがあるときは、図書館に行き、検索用の雑誌をまず調べ、そして、蔵書の中から目的の論文を探し出しました。昨今は電子書籍が多くなり、また、インターネットでも公開されるようになり、図書館に行かなくても、インターネット、スマートフォン等のIT機器を使えば論文をいつでも検索し、閲覧できるようになりました。格段便利になったと実感しています。

多くの一般誌も手元のIT機器で読めるようになり、図書館を訪れる機会が少なくなりました。これには、蔵書が古く新しいものが少ない、借りたい本がないなども関連しているかもしれません。図書館三葛館は、新刊本、読みたい本などの充実にも努めていますので、欲しい書籍などがあれば図書購入リ

クエスト用紙にご記入ください。

情報収集の方法、IT 機器の浸透により読書スタイルが変化し、その実態として書店が漸減するなど、大学附属図書館においても、その立ち位置が大きく変化をしてきました。来年度は、図書館をくつろげる施設にもすることで、余暇時間に本を楽しむ場としても利用してもらえるような試みも考え、来館者を増やしていきたいと考えています。

.....

本を読むこと

助産学専攻科 助教 鈴木 真理 奈

高校生の時、オープンキャンパスで初めて図書館三葛館に入りました。高校の図書館や市立図書館とは違って、医療や看護の本がずらりと並んだその場所で、“いつか自分もこのような本を手にとる日がくるのかな…”とわくわくしたことを思い出します。

大学に入学してからは、課題や実習の度に図書館に行き、これまで数えきれないほどの本を開きました。1冊の本では難しくわからないと思う内容も、別の本を見ると写真や図で表現されていたり、わかりやすく解説されていたりするので、いつも机の上に複数の本を広げて勉強していました。また、国家試験前は閉館の音楽が流れるまで勉強することが習慣となっており、毎日夜遅くまでお世話になっていました。その頃に読んだ本や座っていた席を見かけると、実習や学校生活のことも一緒に思い出され、懐かしく感じます。

教員になってから、文章を書くことや読むことが増え、自分の考えを言語化することの難しさを感じています。あたり前のようにある本は、多くの時間を費やし、思考を凝らして出来上がったものであり、先人たちの知恵の結晶であることをより実感し、本に対する意識が変わりました。今はインターネットを利用すれば、何でも簡単に調べることができますが、臨床現場で直面する問題は答えが一つではない、むしろ答えがないことも多く、問題を解決するためには様々な情報の中から最適なものを導き出さなければなりません。そのような時、本は知りたかった答えだけではなく、ものの考え方や新しい視点、そして言葉の表現も教えてくれるように思います。

図書館三葛館には多くの書籍がありますが、書籍や論文の検索がしやすく、とても見やすく整理されています。昔から読書が苦手な私ですが、それでも通ってしまうのは、今も昔も三葛館が“頑張ろう”という気持ちを後押ししてくれる、居心地が良い図書館だからだと思います。私が本を読むのは、調べものをするときがほとんどですが、今後は今まで手にとったことがないような本も読んでみたいと思います。そして、次は皆さんにおすすめの一冊を紹介できるようになりたいです。

私を支えてくれる本たちとの出会い

保健看護学部 助教 中 島 珠 生

私は小さい頃から空想の中の世界で遊ぶことが好きで、さらには視界に入った人やモノを見ながら、勝手な想像を膨らませることが大好きです。図書館報で何のコミングアウトを始めたのかと疑問に思われそうですが、この私の空想癖は小さい頃の読書好きから始まっていると思うのです。

幼児期には童話、学童期になると偉人の伝記や歴史もの、青年期には推理小説やファンタジーといったジャンルのものを好んで読んでは、登場人物を想像し、その背景を思い描き、時にはキャラクターたちと共に過ごす自分のストーリーを創り出し、空想に耽っていたような気がします。そのため、もちろん図書館という空間は小さいころから大好きでした。児童図書館や学校の図書館は当然のこと、地域の公民館の図書室なども利用しました。公民館は子どもが利用することはほとんどなかったため、少し大人になった気分に通っていたことを覚えています。独特の本の匂いや古い紙の感触が好きでした。もし私の通っていた小中学校にベストリーダー賞があれば、間違いなく獲得できたという自負があります。

そんな私ですが、いつの間にか時間がないことを言い訳にして、本のある生活から離れてしまいました。特に働き始めてから読む本といえば、看護や医療に関連したもの、もしくはマネジメントに必要なビジネス本が中心となりました。必要に迫られて本を読む、仕事での行き詰まりの解消のために本を読む、といった目的での読書が主となり、本来感じていた読書の楽しみを忘れてしまいました。

しかし、数年前のある日、一冊の忘れられない本と再会しました。それは中学校の図書館で出会い、3年間何度も繰り返し読んだ本でした。まさに中学時代に恋に落ちた本と偶然の再会を果たしたのです。その本は、読書好きだった頃の自分を思い出させてくれました。必要に駆られて読む本ではなく、また空想の世界を旅させてくれるような本を読みたいと思うようになりました。そんな頃、この学校に教員として戻ってきて、図書館という場所がまた身近になりました。まだまだ仕事に追われることが多いですが、自分の気持ちをほっこりさせてくれるような本たちと出会える図書館は、私にとっていつも居心地のいい空間だと改めて感じています。

そして、読書好きで空想好きだった昔の自分が、今の自分をつくってくれていると感じます。看護という仕事において、患者さんの思いに共感する力や、新しいケアを創造していく力、チームで働く上での調整力や問題解決能力の基盤になっています。また、何事も楽しもうと思える力も読書や空想により養われた自分の長所だと感じます。たまに想像を膨らませ過ぎて失敗することもあります。でもそれだけで自分らしさだと思います。人生をちょっと面白くしてくれて、勇気をくれる本たちとの出会いを大切に、これからも私らしくありたいと思います。

学生みなさんも、三葛館で多くの本との出会いをしてほしいと思います。もちろん、課題をやり遂げるため、試験に合格するため、実習をクリアするためでもいいと思います。読書で得られる知識によって、自分の中に多くの引き出しを作っておくことは必ず役に立ちます。私にとって、看護の本たちやビジネス関連の本たちは、何かに迷ったとき、困難が生じて立ち止まってしまいそうになったときに進むべき道を照らしてくれるものです。でも、時には恋する気分になれるような本との出会いもして欲しいと思います。そういった本との出会いは、きっと自分自身の心を豊かにしてくれると思います。

その人らしさを理解する

保健看護学部 教授 井上みゆき

看護は、その人らしく生きられることを支えることを一つの業としています。そのためには、その人を理解しなければなりません、それは難しいことです。人を理解するために看護師は日ごろから様々な経験をすることは大切ですが、それには限界もあります。そこで助けになるのが、病や障害をもった方が書いた手記や体験談です。ここでは、3冊の本を紹介します。

学生のころ最初に読んだのは、星野富弘著「愛、深き淵より」立風書房、1981年です。この本は当時、中学校の教員だった著者が頸髄を損傷し、10年以上の入院生活を経て、自分自身の内部の力を認識して、口に筆を加え絵や字を書くことで自立し、退院していくことが記述されています。看護理論家マーガレット・ニューマンが主張する看護職者の責任、即ち「人々が自分自身の内部の力を認識できるように援助すること」と一致すると考え、大学院生の時に、理論分析で資料として使用しました。もちろん、看護の力だけで、患者さんが自立できたとは考えていませんが、たとえ障害や病気をもっても「その人らしく」生きることを支える重要性を確認した本です。今でも時々手に取って読み返すことがあります。古いので三葛館にあるかと検索してみたら、“あります”。皆さんに読んでいただきたい1冊です。

次にお勧めの本は、Team18がクラウドファンディングで作成した「18トリソミーの子どもたち―出会えた奇跡をありがとう―」水曜社、2018年です。この本は、18トリソミーの子どもの写真と共に、家族の思いが記載されています。この本の写真には、天使になった子どももおりますが、何の違和感もなく、とてもかわいらしく、家族愛に包まれています。家族が思っている子ども・生命・死・障害・家族・幸せについて深く考えることができる1冊です。

最後にお勧めの本は、東田直樹著「自閉症の僕が飛び跳ねる理由」角川文庫、2016年です。この本は、自閉症の著者が自閉症の人の内面を平易な言葉で伝えています。28か国30言語で翻訳され世界的ベストセラーになっています。作者は、声を出して本を読むことや歌を歌うことはできても、人と会話することができません。人と話をしようとすると言葉が消えてしまうそうです。自分の思いを言葉で話すのではなく、パソコンに打つことで、本を完成させています。自閉症の方は突然、大きな奇声を上げたり、大きな声で独り言を話したりすることがありますが、このことについて東田さんは、「自分が話したくて喋っているわけでもなく、反射のようにでてしまうのです。・・・止めることは難しく、無理に止めようとすると、自分で自分の首を絞めるくらい苦しくなります。・・・僕たちは口を閉じるとか、静かにするとか言われても、そのやり方がわからないのです。声は僕らの呼吸のように、僕らの口から出て行くものだという感じです。」と記載しています。私は、奇声を上げたり、独り言を話している方を見ると、なぜ、黙れないの？と思っていたのですが、「それは反射で、呼吸のようなもので、苦しくなるので止めることはできない。」と理解できました。すると、奇声も、独り言も、奇妙なものではないと感ずることができました。私が紹介し、持っているのは文庫本ですが、図書館には「あるがままに自閉症です：東田直樹の見つめる世界、初版」、「会話のできない高校生がたどる心の軌跡：自閉症の僕が跳びはねる理由」「会話のできない中学生がつづる内なる心：自閉症の僕が跳びはねる理由」の3冊があります。

ぜひ、読んでみてください、見方が変わり、世界が広がる感じがします。

My Never-Ending Philological Journey

保健看護学部 准教授 山 東 資 子

私が研究に関して図書館で借りる本といえば、これまで一度も貸し出されたことのない書庫に眠っているものがほとんどで、貸出の延長を申し出たとしても、すぐにまた借りられることが多い。私の専門分野は English Philology (英語学) である。近年、日本語で「英語学」というと Linguistics をさすことが多いが、Philology は理論をあてはめるのではなく、歴史的な観点から文化や文学を担う言語の本質に迫る分野で、過去の文献を対象とする。なかでも私は、もともとイギリスにあった英語が、どのようなプロセスを経てアメリカに浸透していったのか、そのルーツを探りながらアメリカ英語の成立過程を紐解いている。そのために膨大なデータが必要となるが、辞書・辞典類だけで本棚が 1 架埋まってしまうほどである。

大学 4 回生の時にアメリカへ 1 年間留学したことがきっかけで、アメリカ英語に関心を抱くようになったが、当時はまさか自分が教壇に立つことになろうとは夢にも思っていなかった。というのも、教員は自分にとって一番縁遠い職業であったからである。実は昔から先生ほど苦手な存在はなく、どうすれば先生方の鋭い視線から逃れられるかばかりを考えていた。そんな私が教員となったことで型破りな部分があることは否めないが、自分らしさを大切にしながら日々教壇に立っている。

さて、私が留学をしたのは今から 30 年近く前のことであるが、渡米前に日本語で卒業論文を完成させ、帰国後に英訳したものを最終原稿として提出することになっていた。テーマは A Study of President Clinton's Addresses: Analysis of His Speeches で、第 42 代アメリカ大統領ビル・クリントンの就任演説と、就任 6 ヶ月前および就任 6 ヶ月後におこなわれた演説を比較し、単語の使い方によどのような変化がみられるかについて分析をした。今思えば、私の Philology 研究の原点はここにあったのかもしれない。もちろん当時は、現在のようにインターネットが発達していない時代であったため、資料を入手するにも一苦勞した。そこで私が通ったのが、大阪にある関西アメリカンセンター・レファレンス資料室であった。いわゆるアメリカ総領事館の一角にあるため、建物の入口で身分証明書を提示した上で、厳しいセキュリティーチェックを受けてから入館しなければならなかった。地下鉄御堂筋線の淀屋橋駅から歩いて 5 分ぐらいすると星条旗が見えてくるのだが、装甲車が停まっていたこともあり、外観は物々しい雰囲気を醸し出していたにも関わらず、何故か私には落ち着くことができた場所であった。今回この原稿を執筆するにあたり本棚を眺めていると、卒論の大学ノートが残っていることに気づいた。資料室で複写をさせてもらった演説のみならず、クリントンに関する新聞記事も糊付けし、我ながら几帳面な字で熱心にメモを取っている。そして何よりも驚いたのが、アメリカ英語研究の参考文献としてよく引用する資料が、当時すでに参考文献一覧に挙げられていたことである。

現在はオンラインですぐに検索でき、わざわざ遠出しなくても簡単に図書や資料を入手できる便利な時代となったが、今一度初心にかえって研究と向き合うことができればと思う。ぜひみなさんも図書館でじっくりと時間を過ごしてみてもはどうだろうか。

子育てと図書館の思い出

保健看護学部 助教 竹内 康子

私は年が1歳半ずつ離れた3人の子どもを育てました。上の子どもが3歳になり幼稚園に入った時から自転車での送迎が始まりました。大きな声では言えませんが自転車の前の椅子に1人、後ろの椅子に1人、そして背中に1人、どこへでも3人連れて行きました。半年くらいしておんぶすることがきつくなり、近くの自転車屋さんに相談して後ろに2人乗せられる椅子を設置してもらい、子どもを3人乗せて車がほとんど通らない路地裏を走りました。この自転車送迎は、親にとってはへとへとになるくらい大変でしたが、子どもたちは楽しかったようで見晴らしのよい前の椅子が人気で取り合いになりました。そのため不公平にならないように毎回座席を入れ替えていました。自転車で3人の子どもを連れまわすのは珍しかったようで、花屋のおじさんから「お母さん、頑張れ」とよく声をかけていただいたものです。暖かく見守ってくださっていたことに感謝しています。今思えばその時は精一杯の子育てでしたが、かなり無茶をしていたと思います。

その頃よく近くの図書館を活用しました。1週間に1回、上の子どもを幼稚園に預けて向かう先は“きのくに志学館（県立図書館）”でした。子どもコーナーへ行くとなくさんの絵本と紙芝居があり、下の子にわずかな時間絵本の読み聞かせをしました。時間に余裕のない中でも、どの本、どの紙芝居を借りて帰ろうかと選ぶのが楽しみで、子どもたちの反応を想像するだけでワクワクしていました。1回に10冊の絵本と紙芝居を借りて帰るのが日課になっていました。家では3人それぞれ小さな椅子に座らせて読み聞かせをしました。「今日はどんなお話?」「それは後のお楽しみ」……。読み聞かせの間、子どもたちは静かに座って食い入るように聞いていました。子どもたちの興味・関心にあわせて「次はこの本」と、何冊も本を読み聞かせました。同じ本を繰り返し読むこともありました。時には予想もしない質問が飛びかい、感想を聞かせてくれました。それがまた私の原動力となり、ほぼ毎日読み聞かせをしました。幼稚園の友達は、我が家のように子どもが大勢いる賑やかなところに遊びに来たがり、いつの間にかよそのお子さんたちが混じるようになっていました。

子ども3人まとめた読み聞かせは発達段階が近いからできたことかもしれませんが、年子3人に対して一人一人じっくり向き合う余裕はなかったのですが、1日のわずかな時間でも絵本や紙芝居を読み聞かせすることは親と子の相互作用をもったコミュニケーションとなりました。その積み重ねが子どもの世界を広げ、親と子の絆にもなったように思います。子どもたちが大人になった今、幼児期の読み聞かせを覚えているか尋ねてみると「もちろん覚えているよ。楽しかった。」と話してくれました。幼いころ親にしてもらった読み聞かせは、親と共有した場と時間とふれあいがあり、幼き日の思い出として大人になっても覚えているものです。

学生の皆さんは将来、仕事や子育て等で子どもと向き合う機会があると思います。そんな時、忙しい時間の中にホッとするひと時を本の読み聞かせをして、じっくり子どもと向き合ってみてはいかがでしょうか。

子育てにまつわる図書館の思い出を述べますが、大学生の皆さんは今常に身近に図書館を活用できる環境にいます。図書館三葛館には専門図書がそろい、専門図書以外にも書籍が充実しています。図書館をおおいに活用しましょう。

自分なりの正しい答えをさがす

保健看護学部 助教 野々口陽子

私は大学教員の仕事に就くまで図書館に行く習慣はありませんでした。小説が好きで、これまでに色々読みましたが、図書館に行って本を探すということはせず、その時に好きだった作家の本や話題になった本を購入して読んでいました。趣味で読む本は、自分の好みで偏った内容であっても問題はありませんが、専門的知識となるとそうはいきません。つまり、図書館は、仕事上、必要に駆られて行くようになりまして、学生のみなさんの多くが、レポートや課題、自習のために図書館を利用するという目的と似たような感じだと思えます。

具体的に言うと、私の場合は授業の準備か研究の計画や考察のための文献を探すということが目的になります。私が図書館に行くときの行動パターンはだいたい決まっています、まず、三葛館のホームページのOPACでキーワードを入れて、大まかに文献の当たりをつけて図書館に向かいます。そうするとお目当ての文献は大抵すぐに見つかるので、中を見て知りたいことが書いてあるかをざっくりと眺めてみます。そして、知りたいことが書いてあれば借りる、いまいちなら棚に戻すということになるのですが、ついでにその周囲にある本も見てみます。図書館はだいたい同じテーマの本が固めて並べられているため、そうすることで、自分が検索の時点で選択しなかったり、検索キーワードにたまたま当てはまらずヒットしなかったりした文献の見落としを防ぐことができます。これができるのが図書館のいいところだろうと思えます。自分が気づかなかった大事なところに気づくことができるというのは、大変ありがたいことです。

一方で、そうやって色々な文献を見ていくと、たまに困ったことが起こります。例えば、同じ看護技術について調べているのに、微妙に方法が違ったり、根拠が記載されていなかったりして、何が正しいのかわからず、答えに迷いが生じてしまうようなことです。そういう時はどうするかというと、それらの本を全部かりて、自分の臨床経験に照らし合わせたり、他の先生に相談したりしながら、学生の皆さんに伝えていいかどうかを吟味し、曖昧だった箇所について自分なりの答えをみつけていきます。でも、困ることと言いながら、これは実は良いことなのかもしれません。複数の本と他者からの助言でみつけた答えは、1冊の本の情報だけでは得ることができなかった、より良い答えのはずだからです。

ここから先は私自身への戒めという意味も込めて書きます。困ったことは他の情報源を使った場合も起こります。インターネット検索は簡単ですぐに情報が手に入りますが、注意しなければならないのは、偏った情報ばかり仕入れてしまうリスクがあるということです。人は自分が見たい情報を優先的に取りに行く傾向があり、見聞きすることによって胸が痛んだり、耳が痛いと感じるような情報を得ることを避けてしまいます。そして時には自分が選択した情報の間違いに気づかないまま、その情報を伝達してしまうということも起こります。テレビも一般的な情報源ですが、一方的に与えられる情報であるため、他の媒体で全貌を調べない限り、テレビから伝わってきた一部の情報を信じ込むことになります。

本もまた、執筆から出版までに時差があり、インターネットやテレビの情報より鮮度が落ちるというデメリットはあります。しかし、専門書に限って言うと、私が惑わされたような多少の情報不足があったとしても、基本的には正しく、偏りが少ない情報を収集できる点においては、他に代えがたい情報源

だと思います。さらに図書館を利用すれば、複数の本を手にとって、同時に確認することが可能です。

情報があふれた時代だからこそ、少し手間をかけて知りえた情報を精査し、自分なりに正しいと言える答えをみつけていくということが大事なのだらうと思います。楽なところに飛びつかず、それぞれの情報源のメリットとデメリットを考慮して、情報の正しさを判断できるようになりましょう。

MIKAZURA NOW!

平成30年度 利用統計

年間開館日	297日
入館者数	23,752人
(1日平均)	79人
貸出人数	4,506人
図書貸出冊数	11,563冊
視聴覚資料貸出件数	187点
相互利用依頼件数	286件
相互利用受付件数	584件
学外利用者数	393人

三葛館の蔵書2018

蔵書冊数	62,720冊
うち洋書	9,221冊
所蔵雑誌種数	1,032種
うち外国語	148種
年間受入図書冊数	874冊
うち洋書	2冊
年間受入雑誌種数	526種
うち外国語	108種
	(2019/3/31 現在)

電子ブックのご案内

和医大図書館では、参考図書や洋書を中心に電子ブックを導入しています。電子ブックは、学内 LAN に接続されたどの端末からでも利用可能です。OPAC（蔵書検索）で「電子ブック」と入力すれば簡単に検索が行えます。また、図書館三葛館 HP の「電子ブック」欄の提供元一覧からアクセスすることも可能です。ぜひ、ご利用ください。

- ★ Maruzen eBook Library : 丸善株式会社による日本語電子ブック配信サイト
 - ★ Books@Ovid : Ovid 社が提供する医学系電子ブック配信サイト
 - ★ Wiley Online Library : Wiley 社が提供する電子ブック・電子ジャーナル配信サイト
- 三葛館電子ブック案内サイト：<https://opac.wakayama-med.ac.jp/drupal/ebteach>



4年間を振り返って

令和元年度ベストリーダー賞第1位 卒業生 上西梨南

こんにちは。この度はベストリーダー賞に選んでいただきありがとうございます。

私はこの4年間たくさん本を借りたと思っていましたが、700冊を超えていたことに私自身も驚いています。振り返ってみると、図書館にはたくさんお世話になりました。私が1年生・2年生の時は、英語の授業で好きな英語の本を読んで感想を書くという「多読」を行っていました。私は英語が苦手だったので、少しでも英語ができるようになりたいと思い、図書館でたくさんの英語の本を読んでいました。3年生になると臨床実習が始まり、授業では聞いたことのない疾患に出会い、その都度、図書館に通い調べるようにしていました。4年生になると、国家試験の勉強のため、参考書や問題集を借りるため図書館を利用することが多くなりました。

この4年間を振り返ってみると、私にとって図書館は欠かせない大切な場所であったと改めて思います。大学生活の4年間の中では、臨床実習や国家試験、事前学習、ゼミなど本を必要とすることがたくさんあると思います。そんな時はぜひ図書館に行ってみてください！学校の図書館には最新の看護雑誌や論文、闘病記など様々な本があり、自分が必要な本が必ず見つかると思います。本を借りることはもちろん、静かなので勉強するにも最適です。在校生のみなさんも図書館を利用してみてください！



令和元年度保健看護学部卒業生の表彰を行いました！

令和2年2月5日に在学中貸出冊数上位者の表彰を行いました。

今年度の卒業生1人あたりの平均貸出冊数は233冊で、第1位の方の貸出冊数は732冊でした。受賞者の発表の際には、皆さん大変に盛り上がり、とても楽しい表彰式となりました。

写真は表彰式にて、森岡図書館長とベストリーダー1位を受賞された上西梨南さんです。卒業生の皆様、4年間たくさん図書館をご利用いただきありがとうございました。



卒業後の図書館利用者カードについて

□利用者カードについて（卒業生の方）

在学中に使用していた利用者カードをご提示のうえ、カウンターで図書館利用者カード発行申請書をご記入ください。在学当時の利用者カードを紛失された方はその旨お伝えください。なお、発行後は三葛館でのみご利用いただけます。

- ・必要書類：運転免許証など住所が記載されたご本人様を確認できる証明書
- ・申請受付：平日9時～17時30分
- ・有効期限：申請をした日の当該年度末まで（年度ごとに申請が必要です）
- ・貸出：2冊/2週間 ※製本雑誌の貸出や貸出延長はできません

□利用者カードについて（附属病院に就職される方）

和医大附属病院に就職される方で図書館の利用を希望される方は、就職後、紀三井寺館で教職員向け利用者カードの発行申請を行ってください。申請から発行までに一週間程度かかります。詳しくは紀三井寺館へお問い合わせください。

発行後は三葛館、紀三井寺館両館でご利用いただけます。三葛館の貸出冊数上限は在学中と同様、10冊/2週間です。

◇次年度、保健看護学研究科・助産学専攻科へ進学予定の方、もしくは教職員向け利用者カードをすでにお持ちで附属病院に引き続き勤務される修了生の方は、上記手続きは不要です。

三葛館は、
保健看護学部、看護短期大学部、助産学専攻科、
保健看護学研究科を卒業されたみなさまの
臨床研究や生涯学習を支援しています！



図書館システムがリニューアルしました

令和元年11月29日より、図書館業務システムの更新作業が完了しました。それに伴い、図書館のホームページが新しくなりました。館内の6台の端末も新しくなり、すべての端末で使用の際にログインが必要となります。以前とは細かに違う点があるかと思えます。なにかわからないことがありましたら、お気軽に図書館職員にお声掛けください。

新ホームページアドレスはこちらです。【<https://opac.wakayama-med.ac.jp/drupal/>】

新ホームページトップ画面画像→
上部のアイコンから、[図書館紀三井寺館]
[図書館三葛館]さらには[大学]のページに
移動できます。
レイアウトもがらりと変わり、見やすく、
必要な情報を得やすくなっています。



インターネットを通じてどこからでも使える
和歌山県立医科大学図書館蔵書検索（OPAC）を
どうぞご利用ください。

ご存知ですか？マイライブラリ

皆様【マイライブラリ】機能は、お使いいただけていますでしょうか？
マイライブラリとは、学内者を対象とした図書館 Web サービスのページです。学生の皆様は入学時のオリエンテーションにて、設定済みかと思えます。
図書館ホームページ右上の[ログイン]または[ゲストさんマイライブラリ]をクリックし、ユーザーIDとパスワードを入力すると、マイライブラリにログインができます。

ユーザーID：図書館利用者カードに記載されている番号

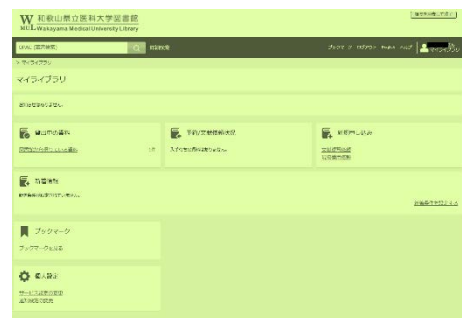
パスワード：マイライブラリ申請の際に決めていただいたパスワード

※お忘れの方は平日 17:30 までにカウンターにお越しください

以下のサービスがお使いいただけます。

- ・自身の貸出中の資料とその返却日の確認
- ・他の利用者が利用中の資料への予約
- ・ブックマーク機能
- ・文献複写依頼 など

便利なマイライブラリをぜひご利用ください♪



令和元年度 展示図書テーマ一覧

第92回「これからの大学生活にお役立ちの本たち」

第93回「マンガで読む」

第94回「高齢者の“いきいき life”」



平成30年度（2018年度）三葛館活動記録

- 4月5日 保健看護学研究科 新入生オリエンテーション
- 4月6日 保健看護学部 新入生オリエンテーション
医学部 新入生オリエンテーション
- 4月9日 助産学専攻科 新入生オリエンテーション
- 5月1日 第1回保健看護学部図書委員会
- 8月6～10日 蔵書点検
- 1月23日 第2回保健看護学部図書委員会
- 3月15日 平成30年度保健看護学部卒業生ベストリーダー表彰式

編集後記

令和最初の図書館報です。ご寄稿いただいた方々の図書館での思い出、読書とは、情報収集の方法など多種多様な内容となっています。また、記事内でおすすめしていただいた本は当館に所蔵がありますので、ぜひ手に取ってみてください。

近年図書館の在り方はどんどん変化してきています。皆様がよりよくご利用していただけるように努めて参ります。

令和2年3月30日発行
図書館報 みかづら（第23号）
編集・発行 和歌山県立医科大学図書館三葛館
〒641-0011 和歌山市三葛 580 番地
TEL (073) 447-2300（代表）
(073) 446-6721（三葛館）
FAX (073) 446-6730（三葛館）
<https://opac.wakayama-med.ac.jp/drupal/>